

2008/9/11(木) 午後 9:46

無題

練習用



0









写真: 上より、オペラ座、自然史博物館のトパーズ、二人の歓談、ベンチから丘を見る、カフェテラスのディナー、ドイツ語メニュー。

9時にホテルのロビーで待ち合わせ、チームが編成された。メンバーはT.K.、O.T.、F.S.、R.T.、T.N.、T.M.。「ゆっくり、のんびり楽しみましょう」ということで「スロー・ライフ・チーム」と(T.M.さんにより)命名。まずシュテファン・ドームを見学。その後お土産屋をのぞいたりしながら散策したが、PETIT POINTという店の刺繍の絵が素晴らしく(ただしかなり高価)、ここで大きな決断をした人もいた。王宮跡まで来た時には一同かなり消耗していて、石段に腰をおろしてしばしボーっとしていた。その時、T.K.青年が「あ、いまスリにやられるところでした」と言う。左耳に携帯を当てながら、右手で(R.T.さんの)バッグに手を伸ばしている男とT.K.さんの目が合って、未遂に終わったということだった。バッグにはパスポートも入っていたようで危ういところだった。お目当ての美術史博物館に着いたのは11時半ごろ、約2時間自由に見学した後博物館前の芝生で昼食。

(ここで、ご自身絵筆もとられるF.S.先生のレポート:)

私にとってこの日もっとも期待していたのは美術史博物館でした。これはハプスブルグ家400年にわたる美術コレクションを中心とする美術館で世界でも最大級の所蔵を有するといわれていますので、当日はごく一部、私はブリューゲルを中心に鑑賞したのですが、建物自体、正面の階段、吹き抜けのドームの天井までの壁画や彫刻、その絢爛・豪華さに圧倒されてしまいました。今回の旅行ではウィーンの芸術、学問の歴史・伝統の重さをずっしりと感じさせられました。この重さにたえながら新しいものを創造していく楽しさと難しさ、フランクルの愛したウィーン、テレジーンシュタットとは別の重さを感じました。

博物館前でチームは解散。O.K.とT.K.は、美術史博物館とマリア・テレジア像を間にして対称的に建っている自然史博物館を訪れた。人間による創造価値の精華がぎっしり詰まった美術史博物館、それと対照的に、巨大な宝石や多様な動物の進化など無為自然の流れを示す自然史博物館、人間の営みと自然の営みをマリア・テレジア像の左右に配置した空間構成は壮大な双幅だ。このあと二人はウィーン大学をめざすが、路面電車がなかなか来ず、ソセージなどほおばりながらもずいぶん待たされたので、やっと乗った電車をすぐ降りる気にはなれず、ドナウ運河を境に建物が歴史的石造りからガラス張りの現代風にかわる風景など循環線からの車中見物を楽しんだ。ウィーン大学では回廊でフロイト像に会えたが、教室は休み中で鍵が掛かっていた。つぎのお目当ては、ザツハ・トルテ。オペラ座裏のザツハ・ホテルにはなんと先客・K.K.先生がにこやかに待っててくださった。「甘くて一人では食べ切れない」などという噂もあったからどんな甘さなのかと恐れていたが、適度の甘さとアンズジャムの酸味の調和にたっぷりの生クリーム、美味しさの体験価値を実現。ここで英気を養って、さらに繁華街に出てスワロフスキーやモンブランを覗き、土産を買い、夕食は韓国居酒屋。T.K.さんが韓国語で話しかけてもウエイトレスはきょとんとしているので、どこから来たのか尋ねたら、マレーシアからとのことだった。(文責:O.T.)

27日の午後はシェーンブルン宮殿見学、そして夜は希望者によるオランジェリ宮殿カフェテラスでのディナー+コンサート鑑賞が予定されていました。私もそれに参加の申し込みをしていました。シェーンブルン宮殿はマリア・テレジア時代に建立されたハプスブルグ家の離宮、その豪華な宮殿と庭園はオーストリアを代表するものといわれていますが詳細はホームページなどご覧ください。実は私はこの部分を書くのを躊躇していました。といひますのは午前中の美術史博物館で、すでに報告しましたように建物や所蔵品の豪華さに圧倒されて、挙句「めがね」を失ってしまったのです。外国の、そしてこんな大きな美術館で失くしためがねなど戻るはずはないと、あきらめようとしながらもこれからの旅行どうなるのかしらと不安に思っておりましたが、M.A.さんのお骨折りで見つかったのです。M.A.さん改めてありがとうございます。感謝しきれない思いです。

といっても夕方私たち-T.N.さんと私-がシェーンブルンに向かったころはまだ解決せず、日中の疲れもあって、めがねなしでは案内書も掲示も読めずひたすらT.N.さんの尻尾をつかんで宮殿の中を歩いていましたので、宮殿のどこを見たのかまったくオリエンテーションがないのです。ともかく宮殿の一部を見学して外に出て、さてどうしよう庭園は広いと話していたところ、「馬車での庭園まわり:5ユーロ」という看板があるのです。「これいいね」といっているところに馬車が戻ってきました。good timing と御者に尋ねると「5ユーロは乗り合い、こっちは個人-は50ユーロ」とのことで馬車での見学はあきらめ、木陰のベンチに腰掛けて、まだ日の高いウィーンの夕方の宮殿と行きかう人々をしばしばぼんやりと眺めていました(写真)。

そろそろオランジェリに向かわなければと歩き始めましたが、これまたなかなかの距離、遅くなった私たちをT.F.さんだったかな?が途中まで迎えに来てくれました。私たちが一番最後だったようです。オランジェリ宮殿のカフェテ

ラスでのディナー、まずは各自飲み物ーワイン、ビール、ジュース・・・と好みの飲み物を注文ーで乾杯(写真は乾杯前)、メニューは(写真)サーモンのサラダ、メインデッシュは鶏肉のマンゴー・ジンジャーソースかけ、マンゴーのゆたかであろやかな味わい、めがねも見つかった安堵も加わり幸せな気分になりました。

いよいよコンサート、会場は縦長のフラットな床に移動式の椅子が置かれ、その奥に舞台があります。私たちは前から3分の1くらいのところに座席をとりました。20:30開演、プログラムの前半はモツァルトを中心に宮殿オーケストラによる演奏が始まりました。聴衆席の灯が消されると舞台はオレンジ、ブルーと照明が変化し、指揮者をはじめ演奏者が影絵のシルエットのように浮かび上がってきて、私たちは幻想の世界に引き込まれていきまーすー残念ながら撮影禁止ー。「ドン・ジョバンニ」などでは、ソプラノとバリトンの二重奏なども入り、オペラの楽しみも味わいました。

休憩時間は舞台に向かって右側がそのまま庭園に出られるガラスの引き戸、そこから庭に出ますと宮殿や銅像がまたまた影絵のように浮かび上がって、日中の暑さを忘れさせる冷気のなかでしばし夜の宮殿を楽しみました。後半のプログラムはシュトラウスファミリーの名曲、バレエのデュエットも加わり、アンコールの最後はラディツキー行進曲、私たちも一緒に手拍子を打ちながら、ウィーンのコンサート気分を満喫しました。22:30終演、昼間の疲れやショックも癒され心地よい涼風を肌を感じながら帰途の地下鉄に向かいました。

昼は美術、夜は音楽と、ウィーンの芸術に時間的にはほんのかすった程度の接触ですが、その魅力を改めて実感、と同時に背景にあるハプスブルグ家の財力と権力の重みを肌で感じた一日でした。(F.S.記)